

一 奉仕活動の本質

矢口 新

1 奉仕活動の底にあるもの

《愛されない奉仕活動》

奉仕活動という言葉は、なんとなく古めかしい感じをいだかせる。この言葉で私たちの頭にピンと来るのは、掃除当番とか、どぶさらいとか、校庭の草とりとか、といった作業である。勤労作業などという言葉もあるが、奉仕活動というふうなふん囲気を感じさせる。人のいやがる活動がまんしてやるといった感じが強い。だれもすきでやる仕事ではないが、と行って、そういう活動がだれかによって行われなければ、社会の生活が成り立たないから、お互に交替で奉仕する、これが奉仕活動という言葉に一番ふさわしい説明の様に感じられる。奉仕ということをごのように考えると、学校で行う奉仕活動というのは、だれにも余り好ましいことではないが、社会生活のために、監督でいやなことを引きうけるということをやらせることになる。そしてたえず繰り返して行っていれば、そういうことが当たり前になって、だれもいやだと思わなくなる。いやではあるが、しかしがまんしながらやる習性が出る。あきらめがよくなるとも言えよう。そしてきちんと割り当てられたどぶさらいや掃除など行うようになる。それは奉仕活動の結果、社会に奉仕する習性が出て来たことになる。

しかしだれもいやがる掃除をきちんとやるようにするには、ある場合には先生のむちも必要になる。子どもはなかなか理屈で説明して納得する所まで行かず、また理屈でわかっても元来が余り好ましい事ではないのだからついサボってみたくもなる。これを制御するのに賞と罰との使いわけが必要になることもある。だれも不名誉な罰をうけることは望まないし、むしろほめられる方が自尊心を満足させるから、そういう所から自尊心と結びついた奉仕活動が出て来る。こう見て来ると、奉仕活動の活動そのものは愛されない活動であるといってもよいようである。社会生活のためやむを得ない活動でありあるいは名誉を得るための手段であったりする。果して、そういうものであるか。

《社会生活における奉仕》

社会は、ただ人が集まっているというだけではない。それ以上のものである。一と一を加えると二となり、二から一を引くと一になるというものではない。例えばここに二人の友人仲間があるとすると、これはそれぞれが相手からある利益を受けとり、またそれぞれが相手にある利益を与えようというだけの関係で成立しているのではない。この二人の結合は、それぞれにとって取引として成立しているのではなく、それ以上のものである。それ以上のものを広い意味で「愛」といった

らよいかも知れない。あるいは集団への志向性、結合への志向性といったらよいかも知れない。

家庭生活において、われわれはそういう点をよくつかむことが出来る。家庭は決して、取引きの相手のあつまりでなく、運命の共同体である。それを育てることにおいて、自分も育ちゆくのである。こういう場合は、われわれは、家庭のためにつくすこと、相互に相手につくし合い、つかえることに生きがいを感じ喜びを感じる。夫は妻につくし、親は子につかえ、妻は夫につくし、子は親につかえるということにおいて、自分の生命を燃焼させて行くのである。それは、そういう風につかえつくし合わなければ、その結合が成り立たないというばかりではない。それ以上である。つくし合うということは、お互に取引しているということではない。家庭を育てること、そのことに自分をむけているのである。奉仕とは本質的にこのようなものである。

家庭のような運命共同体においては、奉仕ということは、極めて顕著にあらわれる。典型的といってもよいかも知れない。しかし家庭ばかりでなく、この奉仕の精神がない所には、社会というものは本来成り立たないのである。われわれが利益社会と呼んでいるものにおいてもこの奉仕の精神は根底に生きているのである。利益の取引による単なる契約として社会は成り立つことではないのであって、その地盤には、お互の奉仕を前提として考えているのである。お互に相手のためになることを前提としないような取引きはないのであって、取引きの場合には、それをただ明確に計算しているというだけのことである。だから利益社会といっても、それはただ一つの類型として利益社会的と考えられただけであって、具体的にそれが社会として成立つためには、取引きすることだけでなく、そこに奉仕するという精神がなくてはならない。それが人間的な結合なのである。

人間は奉仕することにおいて、生きて行くことが出来るのである。職場は一つの利益社会といわれる。上役が下のものに何かを命ずる。下のものは、その命ぜられた通りにやる。それ以外何もしないかというところではない。上役の指示したことに誤りがあれば、これを正し、よりよくする。場合によっては、こうしたらどうかと意見も出す。そういう風にしてその社会の仕事をよりよくすることに於いて、それぞれの人々は安住の道を見出す。ただ与えられた仕事をやるだけでなく、ただ自分の労働を売っているだけでない。ただ賃金をとるために働いているだけでなく、やはり社会そのものにつくしているのである。それが人間が社会生活をしているということである。そういうことがなければ、人間は機械と同じことになってしまう。人間はやはり社会生活そのものを愛しているのである。

《ひろがれる自我》

われわれは自分自身を愛する。これはだれもよくわかっていることである。しかし人間はただ自分自身を愛するばかりでなく、他人をも愛する。あるいは物を愛する。これもすぐわかることであろう。ところで、われわれは自分をすてても他人を愛し、物を愛することがある。もちろん命をすてることが、はじめからはつきりして、そうして他人を愛するために命をすて、物を愛するために命をすてるといふことではないであろう。自分も助かると思い、命をすてなくてもよいと思うから危険を冒すのであろう。そして結果において命をすてることになるのである。だが大切なことは、危険を冒して、そういうことをするということである。つまり自分を愛すると同じように、人を愛し、物を愛するのである。これは大切な人間の社会的性格である。

人間の自我は拡がりをもつということが出来る。われわれは自分の

属する学校や、職場や、集団の悪口を人に言われると腹を立てる。それは自分が、自分の属する学校や職場やグループにおいて、自分としての存在を保っているからに他ならない。同様にして、外国に旅行して、国民として恥かしくない行動をするように心掛けるのも、自分というものが、単に自分の肉体のみでなく、自分の国にひろがっているからである。自分は国というものを自分の中にもっているのである。そこでわれわれは、自分の属するグループを愛し、学校を愛し、民族を愛し、国を愛することにおいて、満足するのである。これは言葉で言えば、自我の満足というのであろう。併しこの自我は、ひろがれる自我である。社会となれる自我なのである。この意味から言っても人間は、社会的な存在である。

《奉仕の根本》

われわれのひろがれる自我はその愛する社会のために献身する。学級を受けもった担任の教師は、その担任の学級が、すくすくとびるように様々な工夫をこらす。様々な奉仕をする。例えばこの教室のここへ書棚を置いて、みんなで本を集めておこうではないか。ずいぶんたのしいだろうな。よし、本棚は僕がつくってやろう、——こういった調子で先生は本棚づくりに汗水たらす。そして出来上ってみんなの子どもが喜び、本を集め、楽しんで読んでいる様子を見て、教師も満足する。教師の学級を愛する心は、こうして奉仕活動を通じてみたださ、更に発展して行く。

人間が成長するということは、ある意味で自我が拡がりをもって行くことである。自分だけを、自分の肉体だけをしか自分と考えられない段階から、様々な社会につながり、それらの社会を自分のものとして考え、そのように行動することが出来るようになって行く所に、人

間の成長がある。一人の人間が様々な社会に関係し、様々なグループに関係をもち、それらを愛して育てて行くことが出来るということ、それは豊かな生活である。その活動は様々な社会に奉仕している活動である。

奉仕ということ、報酬と結びつけて考える形式的な考え方があるが、それは本質的には意味のないことは、以上述べた点からも明らかであろう。報酬が事実としてあるか、ないかということが問題ではない。広い意味で言うなら、自我の満足ということも報酬なのである。有形の報酬があることも、別に奉仕を否定する要素ではない。問題はむしろそれより根本的な所にある。自我が社会的な自我として拡がっているかどうかということである。拡がれる社会我としての考え方や行動が奉仕を生み出す根本なのである。

2 教育における奉仕活動

《奉仕の体験》

学校教育で奉仕活動を行わせるのは、ただそういう活動を行わせるのが目的であるのではないことは言うまでもない。奉仕の精神を子どもの中にちかちかすることが目的なのである。しかし、またそれはただ奉仕の精神だけの問題ではない。とくに観念的に奉仕の精神を問題にしているのではない。

既に見て来たように、奉仕活動というのは人間の社会的性格からくる活動なのである。いわば奉仕的性格に基づく活動なのである。その活動をただ形式的にするということが大切なのではない。例えば、掃除当番をする。そういう活動をただ形式的にやっているということは大

して意味のあることではない。まして掃除の仕方を覚えるなどということとは、何も当番としてやる程のことではない。こんなことはだれにもわかっていることである。ところが、とかく形式的に掃除をやらせることに終ってしまつて、子どももいやいやながら、きまつた事だからやっているとということに終つてしまふ。

といつて奉仕の精神というものを、ただ観念的に説いて聞かせて、奉仕の精神を養うということではいかとうと、それでも社会的性格としての奉仕的性格は育成されないのである。昔の教育ならば、お説教によつて、奉仕の重要さを説くことは大に行われた。そして一方それと併行して、ガムシヤラな奉仕活動が強制された。奉仕ということの社会生活における意義を説明することも、もとより大切なことである。そういうことを自覚させることは大いに必要なことである。しかしそれは合理的な解釈の段階であつて、どこまで本当のことがわかるようになるか。前に述べたような奉仕ということの本質的なことが本当にわかるには、実践的な理解、体験というものがなくてはならないのである。

けれどもまた、その実践的理解とか、体験的把握とかは、単にガムシヤラな行動では成立しないのである。昔はよく、勤労奉仕などといったことが、ガムシヤラに行われた。ちやうど読書百ぺん意自ら通ず式に、くりかえし実践しているうちに、わかってくるという実践的教育(?)が行われたのである。しかしそれは決して、教育として、正しい方法でない。盲目的な体験にたよるといふことは、近代的な教育方式としては貧困である。

くり返して行うということが悪いということではない。人生の中には、くりかえして行い、その積みあげられた所から真の体験的把握がなされることが多いのである。しかし何をどうくりかえすかは、大い

に問題にしなければならぬことである。

《性格の形成》

奉仕において中核をなすものは、その人のひろがれる自我であることを述べた。その社会を愛し、そこに奉仕することが大切なのである。否、その社会を愛し、そこからそれにつくし、仕える活動が起つて来るのであり、それを奉仕的な活動というのである。子どもが学級を愛し、学級を育てようとする時に諸々の活動が起つてきて、はじめて奉仕活動となるのである。形の上では、同じ活動であつても、その根本に愛のない活動は似て非なるものであつて、ただの労務提供であり、極端な言い方をすれば、奴隷的労働である。使役として使われているに過ぎない。

かく見ると、奉仕活動というのは、その形式的な活動以前に問題があるのである。ただ、活動をするということでない。その以前に大切なものがあるのである。ひろがれる自我の問題があるのである。

自我意識は十二、三才以後の青年期において確立するといわれる。小学校の子どもにはまだ、自我意識というものには確立していないと、一般に言われる。もちろんこれは相対的な意味であつて、小学校時代に、そういうものが全然ないということではない。けれども、如何なる場においても、常にその中における自己を意識し、自己と客観との関係を考へて行動するというようなことは、やはり青年期にならなければ出来にくいことである。そういう自我が成長して来なければ、社会を愛するというような自我もまた成立つはずはないのである。自分を愛すること、社会を愛することが、よくわかるようにはならないであらう。

奉仕活動ということが、ひろがれる社会我を中核としているもので

ある限り、小学校の子どもに本質的な奉仕を要求することは無理であるということになる。それは一応認めなければならないことである。

しかし実は、そこにむしろ教育の目標があるのである。子どもの中に、そういうひろがれる自我を養う、そういう社会的性格を育てること、そのために、学級生活において奉仕活動を行わせるのである。子どもといえども全然自分を愛することを知らないわけではない。自我意識がないわけではない。それは一つの手掛りなのである。また学級を愛することを知らないわけではない。学校を愛することに全く無感覚なのではない。やはりそのめばえはあるのである。それが一つの手掛りなのである。それを発端として、次第にひろがれる自我を実践的に育てていくこと、ここに学級や学校の奉仕活動の目標があるべきなのである。

以上述べたことを要約すると、教育において、奉仕活動をとりあげるのは、ただ単に活動そのものをさせるということではない。それでは、労働の提供ということになるだけである。いうまでもなく、人間の育成にあるのであって、社会的性格としての奉仕の性格を体得させることにある。それはただ観念だけの問題でなく、態度であり、一つの習性と考えるもよい。そういうものを子どもの中に植えつけるのである。育てるのである。言いかえれば、社会生活をよりよく育てようという態度と実践力を身につけさせることなのである。

3 学級における奉仕活動

《学級を愛するふん囲気》

学級の子どもが、ただきまった奉仕活動を形式的にやっているだけ

では、教育としての意義が薄いのである。子どもがそういう活動をする場合の、置かれ方が問題なのである。つまりただ命ぜられたことだからやる、きまりだからやるというものではないのである。奉仕とは本来そういう外から押しつけられたものでなく、心から、進んで行うものなのである。

だから、奉仕活動をさせる場合には学級の子どもには、学級をよりよくしよう、楽しくしよう、美しくしよう、立派にしようという内面的な動機が存在してはなくてはならぬ。これは何か活動をする時に、その活動をする理由を説明するというようなことではない。そういう空々しいものでなく、子どもの内面的な心情としてあること、あるいはふん囲気がそうなっているということである。

つまり学級が全体としては楽しいものであり、自分の学級であり、それを誇りとし、いろいろな夢を実現する場となっているということである。そういう地盤は一朝にしては出来ないものであって、長い間にちちかわれるものであるが、そういうものが根源の原動力となつて、様々な奉仕活動が表にあらわれてくるのである。活動としてあらわれたことは、むしろ結果であつて、そういう行動があらわれるまでが大切な教育なのである。しかし、このことは、そういう活動を導き出すために、子どもに言つて聞かせたり説明したりする必要があるということではない。大切なことは実践的であることである。ということとはつまり、出来るだけ小さきみに、身近かなこと、具体的なことから、実践的に社会的、奉仕的活動をつづけて行くということである。教師が何かある一定の活動形態をもつていて、そういうものを、何の準備もない子どもに押しつけようとしてはならないということである。

奉仕活動というようなことは、とかくある形式が考えられ勝ちであつて、それに教師がとられ勝ちになるのである。掃除当番というよ

うなことは、極めて一般的であって、当り前のことであるが、子どもにとつては、決してそうではない。それが奉仕活動であるためには、やはり心の準備があるのである。学級をきれいにすることに心をもやしていなければ、掃除当番はただの労務提供にしかならない。そういう労務提供をただくりかえさせているだけでは教育にならないということである。それが教育になるためには、クラスを愛するということ、それに基いた奉仕ということがよくわかっているのではなくてはならぬ。それには、子どもにわかりやすいちよつとしたことで「ああよかった」とわかるような奉仕活動が行われて、そういう奉仕が、抵抗なく子どもにも受け入れられていなくてはならぬ。そういう地盤の上に、だんだん、本質的な奉仕活動が行われるようになるのである。

《わかりやすい奉仕》

子どもにわかりやすい奉仕ということには、いろいろな条件があるが、一つには、社会の大きさということもあるのである。学級への奉仕ということになると、子どもにはなかなかむつかしいのである。特に小学校の程度では学級五十人の社会というものを愛するようなことは中々むつかしいのである。もちろん全然出来ないということではない。高学年になれば、他の学級と自分の学級というようなことも考えられるようになる。しかし低学年ではそういう社会に対する奉仕というようなことが子どもにピンと来るのはむしろ学級よりも、もっと小さいグループである。小さなグループならばそれに奉仕するということは、低学年でもある場合、ある事柄によつては可能なのである。よく学級内のグループで、自分のグループと他のグループとの対抗意識で、グループのために奉仕をするというような活動が行われていることを見ることがある。高学年にても、そういう程度のグループがピ

ンとくることが多いのである。従つて、そういうわかりやすいグループから、次第に、社会に対する奉仕を体得させて行くというような、段階的な指導が必要になるのである。これはしかし低学年はグループで、高学年は学級への奉仕というような図式を言っているのではない。低学年でもわかることなら学級の奉仕があつてよいし、高学年でもグループへの奉仕が行われるべきである。要するに、固定した形式でいふもただ学級への奉仕ということだけしか考えないというような余裕のない考え方であつてはならないということである。

《多面的な活動》

子どもにわかるということについては、もう一つ、奉仕活動の内容の問題を考える必要がある。現在考えられている活動は、とかく大人の考えたこと、また学校の管理とか、学級の管理とかの面からのみ、考えられ勝ちである。そして理屈の上では、当然のことであつて、間違いではないが、子どもにもそれを理屈で押しつけて、わからせようとする傾向があるのである。その理屈が、子どもに納得いかなければ、あるいは感情的に受け入れられない場合は、形が奉仕活動であつても、実は奉仕にならない。

子どもの考えていること、とくに子どもが自分たちの社会で何を表現しようと考えているかということに基いて奉仕をさせるように指導することは大切なことである。それは素朴であつて、大人からみれば、あるいは大人の社会からみれば、本質的でないこともある。しかし教育的にみればそれでもよいのである。もちろん、最後に到達する所は社会生活の本質的なことについての奉仕でなくてはならないが、それに行くまでの段階があるのである。

こういう点から考えて、奉仕活動の内容は多面的でなくてはならな

い。すなわち、出来るだけ幅広く、子どもの実現しようとしていることをとりあげてやるという意味で、多面的であることが望ましいということである。

多面的であるということはまた別の側からも必要である。学級内の様々の子どもは、それぞれ特色のある考えをもっているのである。それらをそれぞれ個性に応じて生かし、それぞれの方式で学級に奉仕させるには、やはり多面的な奉仕活動が考えられなければならない。否、子どもの特性に従って、積極的に活動させれば、自ら多面的になるということである。もし掃除当番だけで奉仕の態度を身につけさせようというような一律の考えをもつたらば、様々な子どもに奉仕のたのしさというものを体得させることは遂に出来ないであろう。

学級の生活をよくすることは、具体的には様々なものがあるのであって、普通の学校で近ごろ行われている児童会、生徒会の各部とか委員会とかでやっている様々な活動、例えば図書部・新聞部・整美部・保健部・貯金部などというのはいずれも相互に奉仕する組織である。学級においてもそういうことがどしどし行われてよいわけであって、そういう場を設けてやることは、教師の仕事である。子どもの考えていること、希望することといってもそういうことについて、教師がヒントを与えてやらなければ、子どもは白紙からは考えられないのである。そこで、そういう場を設けてやり、それを地盤にして、子どもが自発的に考え出すようなことがあれば、それはどしどし入り入れてやる必要がある。そこから本当に具体的な奉仕活動がはじまるのである。だから、たとえ教師が、場を設けてやる場合でも、一定の形を押しつけて、それをやらせるということであってはならないことになる。子どもに、どこまでも具体的に、わかることでなければ、本当の奉仕にはならないということは、充分注意しなくてはならない。具体的に

わかるということは、これこれこういうことが学級のためになるから、やってやろうと自発的に考えられるということである。

《奉仕活動の指導》

奉仕活動というのは、それが人にみられたり、また、その結果が具体的にあらわれることばかりではない。むしろ無言の奉仕であり、純粹にその社会を愛するが故の奉仕であることが望ましいといえよう。しかし教育として考える場合に、いきなりそういう段階に到達することは、むづかしい。むしろある奉仕によってこれだけ学級がよくなつたということが、わかる方が教育的である場合が多い。そういうことを通じて、次第に、高い奉仕に身をささげ、十年一日の如く社会を愛する奉仕をするような性格をつくるのが最後の目標であろう。子どもに奉仕の意義を認めさせ、その尊さを体験させることも大切なことであって、ただ奉仕をさせればよいのではない。

教師は常に奉仕活動を通じて、その意義を子どもに自覚させるように、子どもを指導しなければならないのである。すべての子どもが、それぞれの立場で、奉仕をするように、またすべての子どもが、他人の奉仕を正しく評価するように、そういう目で子どもが自分の生活を見ることが出来るように指導するのは、教師の最も大切な仕事である。言いかえれば、子どもが学級生活を通じて学級に奉仕し、お互の奉仕を正しく認めて、学級を愛してゆくこと、そこに生活のよるこびを見出して行くことが出来るように指導してやらなければならない。つまり学級という場を、真に社会生活の場とすることである。学級という社会生活も奉仕において、本質的に成立つものであることを体験的に把握して行くことが、学級における奉仕活動のねらいでなくてはならない。